

# THE **A** MUSEUM

Vol.13-3 第 39 号 2019.2.16

Saitama Prefectural Museum of History and Folklore



特別展

## 東国の 極地 楽獄

開催期間 **3/16(土)**  
～ **5/6(月・振休)**

〈休館日〉月曜日(3/25、4/29、5/6は開館)

左上：埼玉県指定文化財 阿弥陀廿五菩薩来迎図(鴻巣市 勝願寺、部分)／右下：閻魔王坐像(越谷市 清浄院、部分) 背景：春の鎌倉 光明寺

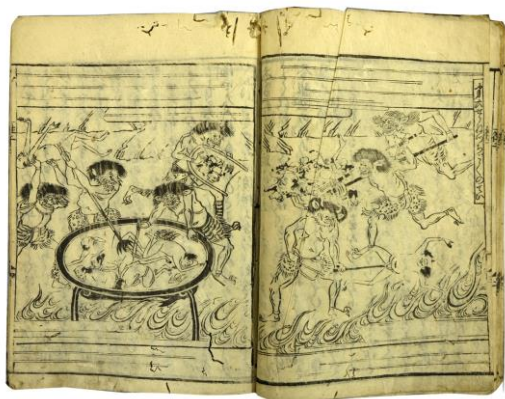
地獄を厭い、極楽を求めるころは、浄土信仰と呼ばれ、古来人々の関心を集めてきました。浄土信仰は数多くの仏教の宗派の中で重要視されてきましたが、東国では、浄土宗の広がりがめざましく、浄土宗開祖の法然(1133～1212)に帰依して修行に励んだ熊谷直実改め蓮生(1141～1208)や、鎌倉時代に東国で布教を始めた良忠(1199～1287)など、各時代の傑僧の活躍が目を惹きます。本展では、地獄極楽の思想と、東国における浄土宗を中心とした浄土信仰の歴史を、多彩な美術品や歴史資料を中心に探ります。





## I “地獄極楽”の誕生

「地獄極楽」という言葉によって代表される“あの世”の具体的な世界観が初めて示されたのは、天台宗の僧侶源信(げんしん) (942～1017)によって10世紀に撰述された『往生要集』(おうじょうようしゅう)でした。極楽とは極楽浄土(ごくらくじょうど)のことで、阿弥陀如来の浄土(=清浄な国土)のことを特にそう呼びます。



往生要集(埼玉県立文書館、足立家文書)  
※後期展示:4月16日～5月6日

そこは安らかで楽しみに満ちた、苦痛とは無縁の世界です。一方で地獄とは、人の生前行った善行や悪行によって行き先の定まる世界、六道(ろくどう)の一つで、最も苦しみ多き場所です。地獄と極楽、この二つの世界は、もとは全く異なる文脈の上で語られた概念でしたが、現在でも多くイメージされるように、地獄極楽が対比するものとして認識されるようになるのは、『往生要集』の撰述が大きな契機だったのです。『往生要集』において語られる思想は、多くの人々に絶大な影響を与えました。

## II 戦乱の東国から 一彼岸への旅路一

治承4年(1180)、伊豆で挙兵した源頼朝は、東国の武士たちを従えて鎌倉の地に入ります。争乱の時代を生き延びた武士たちにとって、そのもっとも根源的な自らの生と死への不安に応えたのが浄土信仰であったことは言うまでもありません。そのため、中世東国における浄土信

仰の最大の担い手は武士たちでした。その典型的な例が、熊谷直実(くまがいのおざね) (=蓮生(れんせい)・1141～1208)による浄土宗祖法然(ほうねん) (1133～1212)への出家帰依です。蓮生は修行に励み、師の法然に「坂東の阿弥陀仏」とまで言わしめたといひます。



熊谷蓮生坊絵詞(埼玉県立熊谷図書館、部分)  
※ 前期展示:3月16日～4月14日

## III 東国の地獄極楽

### 一 浄土宗第三祖良忠と関東三派の東国布教一

法然の滅後、東国(関東から東北地方にかけての地域)で浄土宗の教えを広めたのは浄土宗三祖と言われる然阿良忠(ねんなりようちゆう) (1199～1287)です。良忠は各地で布教するとともに、光明寺(神奈川県鎌倉市)を活動の拠点として浄土宗の教学の集大成に努めました。彼は、東国への浄土宗布教の第一人者と言っても過言ではありません。良忠は弟子の寂慧良暁(じやくゑ りようきやう) (1251～1328)に足立郡鳩井(現在の川口市鳩ヶ谷周辺)の免田(めんてん)を譲っており、武蔵国ともゆかりのある僧侶です。

良忠の代表的な門徒たちは、それぞれの教義を主張し、東国では良暁の白旗派(しらはた)・尊観良弁(そんかんろうべん) (1239～1316)の名越派(なごえ)・そして埼玉県寄居町の善導寺が発祥の地とされる唱阿性心(しょうあしょうしん) (?～1299)の藤田派の三派に分かれます。白旗・名越・藤田の関東三派は、関東一円から東北まで、それぞれの地で、それぞれの縁を結びながら、

その教えを広めていきました。この三派の動きが、東国における浄土宗の教えを人々にいっそう浸透させることにひと役買ったのです。



埼玉県指定文化財 阿弥陀廿五菩薩来迎図(鴻巣市 勝願寺)

#### IV 地獄極楽のそれから

関東三派の教線を広げる争いは、京都の浄土宗総本山知恩院を勢力下においた白旗派が、16世紀に入って藤田・名越の二派を抑えて主流派となります。この白旗派を外護(=僧侶以外の人々が、権力や財力で仏教を保護すること)にしたのが、後に江戸幕府を開く徳川家康です。家康は、関東入国後まもなく増上寺(東京都港区)第12世観智国師に帰依し、増上寺を菩提所とします。その後、観智国師は家康の後ろ盾を背景に、弟子たちの教育に力を注ぎ、浄土宗の発展に寄与しました。

いかに有力者の外護を得て、宗派の影響力を強めるかに腐心する動きが東国で繰り返されていた一方で、市井の人々の地獄極楽への篤い信仰は、宗派を問わず変わらずにありつづけました。“あの世”を思う心が、人々の身近に、そして最も切実な形で顕在化したのが江戸時代です。各地には現在でも、人々の地獄極楽への思いが表れた宗教美術が数多く残されています。「東国の地獄極楽」とは、寺院や僧侶の旺盛な活動により育まれた歴史である一方で、そこには人々の地獄極楽への畏怖やあこがれが息づいていたのです。



六道図(川島町 金剛寺、部分)

#### 断章 ひろがる地獄極楽

地獄極楽の信仰と、それに関わる美術品や資料は、かつて多くが寺院や有力者たちのものでした。しかし、江戸時代以降、地獄極楽の信仰は多彩な展開を遂げ、さらに寺院の側からも出開帳(でかいちよう)といった形で人々に積極的に公開されるなど、その教えとともに爆発的に広まります。また、地域の重要な行事として、地獄極楽をめぐる民俗行事も盛んに行われ、地獄極楽の信仰は人々の身近にあるものとして受容されるようになったのです。



立ち絵「地獄めぐり」(当館蔵)

この特別展では普段は寺内に大切に安置され、ほとんど見ることのできない貴重な仏像・仏画を紹介します。また、本展が初公開となる作品や資料も多数出品されます。

春のお彼岸シーズン、この機会に“あちらの世界”へ思いを馳せてみませんか。

(展示担当 西川真理子)

皆様のご来館を心より  
お待ちしております





## トピックス 建築物紹介コーナーに博物館模型を展示します

県立歴史と民俗の博物館の前身である県立博物館は昭和46年(1971)、埼玉県設置100周年を祝う埼玉百年記念事業の一つとして大宮公園北西の一角に建設されました。その後、平成18年(2006)の博物館の再編成を経て、竣工から40年以上の月日が経過した現在でも変わらぬ姿で、多くの方に親しんでいただいています。

当館を設計したのは日本に近代主義建築を確立した建築家の一人、前川國男氏です。竣工当初から注目され、日本芸術院賞(1972年)、毎日芸術院賞(1972年)、建築業協会賞(1973年)、公共建築100選(1998年)、日本建築家協会25年賞(2002年)などを受賞しており、日本のモダニズム建築物として大変価値のあるものとなっています。

そのため、当館には、個人、団体問わず多くの方が建物を見学するために来館されます。当館としてもこの価値のある建築物をPRするため、平成25年度からエントランスロビーの一角に建築物と前川氏の紹介パネル等を作成し、展示コーナーを設けました。



エントランスロビーに設置されている建築物紹介コーナー

さて、この建築物の紹介コーナーですが、3月上旬から新たに博物館の模型を展示することとなりました。この模型は、建築時に製作されたもので、模型のプレートには当時の施設名称である「埼玉県立博物館」と竣工日、そして設計・監理者の「前川国男建築設計事務所」の記載があります。



展示予定の博物館模型

模型は、建物が全て木で製作されており、その周りには現在とほぼ変わらぬ位置に樹木が設置されています。また、当館の大きな特徴である開放的な水平連続窓や、季節展示室や半地下の展示室から望むことのできる竹林などが精巧に再現されています。

この建築模型は設計者の前川氏の設計思想を辿るうえで大変貴重な資料であり、建築の専門家でなくても、様々な角度から建物をイメージすることができる模型は自然と心躍らせてくれるものがあります。



正門からエントランスへ続く中庭部分

当館に来館された際は、この建築物紹介コーナーにぜひお立ち寄りいただき、モダニズム建物をお楽しみください。この模型をご覧のうえ建物の内外を眺めていただくと、きっと新たな発見があるはずです。

(施設担当 内藤伸一)

## コラム 大宮公園の「過去」から考える「未来」の公園の機能

### 大宮公園開設前夜

大宮公園が明治18年(1885)に開園してから来年で135年が経ちます。この間、大宮公園では運動場の建設や池の設置など、その機能を拡大させながら訪れる人々の憩いの場となっています。平成29年度からは大宮公園の次の100年を見据えた整備を考える、グランドデザインの検討も始まり、今後さらに変化していきます。その前に過去を今一度振り返り、未来を考えてみましょう。

公園設置の国内初の法令は明治6年(1873)太政官布告第16号です。「…人民輻輳ノ地ニシテ古来ノ勝区名人ノ旧跡等是迄群集遊観ノ場所…永ク万人偕楽ノ地トシ公園ト可被相定ニ付…」とあり、昔から人々が集まる場所を公園にしようという意図が分かります。この布告にはお雇い外国人の影響があったといわれています。日本にとって目標であった欧米から来た彼らの意見は無碍にできなかったでしょう。

大宮公園はこの太政官布告を根拠に明治17年(1884)に設置を許可され、翌年開園します。公園の土地は、もともと氷川神社の敷地であり、明治維新の際に政府に上知(没収)されたものです。布告文中では公園が設置できる場所を「群集遊観ノ場所」としており、その例に東京の「金龍山浅草寺」「東叡山寛永寺」の境内、京都の「八坂社」「清水」の境内など、主に社寺境内が挙げられていました。大宮公園もまさにこの布告の狙い通りに設置されました。

### 大宮公園改良計画

一等地に開園した大宮公園ですが、幾度か改良が計画され実行されました。特に注目されるのが、埼玉県旧菖蒲町(現在の久喜市)出身の林学博士本多静六と、田村剛による計画ではないでしょうか。彼らの計画が出された大正10年(1921)、日下薙山が雑誌『庭園』第3巻第6号に「模範の大宮遊園地の計画」と題した論を投稿しています。この遊園地とは現代の遊園地とは異なり、宿泊所や食堂、運動場を設けた総合的な娯楽場のことです。日下は本多・田村の計画した大宮遊園地について述べており、計画段階でしたが、温室や促成栽培場をつくり、新鮮な野菜や果物をお土産にできるようにしようと考えられていたようです。さらに日下は、「大宮遊園地で都会の労働者に名士の講義を聞かせたり、芝居を見せたりすることは、休みのたびに

酒におぼれるよりも良い」とし、公園の社会的な機能にも言及しています。

### かつての海外観光客

以上のように、神社境内から来訪者の余暇を過ごす場所に変化していった大宮公園ですが、訪れる人は埼玉県や近隣の住人ばかりではありませんでした。時代は少し戻りますが、明治44年(1911)12月に提出された「氷川公園<sup>\*</sup>設備及拡張ニ関スル件」という意見書に、「…殊ニ近來外国人ノ観光団ハ必ラス此氷川公園ニ足ヲ止ムルヲ例トス…」とあり、外国人の訪問地になっていたことがわかります。現在、当館にも海外からのお客様がいらっしゃるがありますが、この意見書の書き方を見ると当時はもっと多くの外国人観光客がいたのかもしれませんが。(\*大宮公園の当初の名称)

### 未来の公園の機能

現在の大宮公園は小遊園地や、プール、小動物園など施設の充実が図られ、週末や正月には多くの人々が訪れ活気にあふれています。さらに今年のラグビーワールドカップ、来年の東京オリンピック・パラリンピックでも埼玉県は競技開催場となっており、海外選手のホストタウンや事前トレーニングのキャンプもあって、今まで以上の国内・海外観光客の来県が予想されます。これらの大会の海外選手やそれを応援しに来た観光客の多くが明治時代のように大宮公園を訪れ、国際交流・異文化理解の場となれば、それは公園の新たな機能といえるでしょう。またこれを機に、過去の計画のように公園内で市場が開かれたり、演芸が催されたりすれば、公園は新たな集いの場となります。

このような国際交流・社会交流の場という大宮公園の機能の一つとして、当博物館を楽しんでいただければ幸いです。

(総務担当 庄子亮平)



埼玉百年の森に今も残る、大正10年開業の大宮遊園地ホテルの門柱



## 歴史のしおり 埼玉の旧石器時代の古さと黒曜石流通のおどろき

現在の埼玉県域にわれわれ人類が暮らし始めたのはいつごろでしょうか？遺跡から発見される炭化物等の科学的な分析から、今からおよそ3万5千年前と考えられています。このような人類の歴史の一番初めの時代を「旧石器時代」といいます。何万年という年月のなかでは気候も大きく変化しました。極寒の氷期と、暖かい間氷期が交互に訪れ、およそ2万5千年～2万年前には最後の氷期の最寒冷期をむかえました。海水面は現在よりも約100m前後も低下し、瀬戸内海や東京湾は陸地となりました。今とはまったく異なる厳しい環境の中で、人々は暮らしていました。

旧石器時代には、まだ土器は利用されていませんし、また日本の土壌は酸性のため、木や骨など腐りやすい有機物は残りません。結果的に見つかる旧石器時代の遺物は石器のみです。

このような旧石器時代に関する遺跡は、現在までに全国で1万ヶ所以上発見されており、埼玉県内でも400ヶ所以上が確認されています。そして、人々が暮らし始めたころの古い遺跡の一つが、さいたま市西区にある清河寺前原遺跡です。平成13年から14年に発掘調査が行われ、その結果、初期の遺跡に特徴的な「環状ブロック群」が発見されました。ブロックとは、集中して見つかる石器の一群です。それらのブロックが直径数十メートルの環状に連なるのが「環状ブロック群」です。それは人々がキャンプをした跡とも考えられており、埼玉県内では数例しか見つかっていません。

また、清河寺前原遺跡では、比較的透明度の高い黒曜石が大量に発見されました。黒曜石(岩)は、マグマが急速に冷えてできた岩石です。旧石器時代の石器の材料に好まれ、多用されました。火山の多い日本では、これまでに多くの黒曜石の産地が見つっていますが、埼玉県内では現在のところ発見



せいがんじまえはら  
清河寺前原遺跡 出土石器(黒曜石)

(埼玉県教育委員会 写真提供)

されていません。ですから、埼玉県内の遺跡から検出される黒曜石は別の地域から運ばれたと考えられています。関東周辺では、長野県の和田峠や、栃木県の高原山、また海を隔てた神津島などが黒曜石の産地として有名です。なかでも、長野県の和田峠を産地とする黒曜石は、埼玉の旧石器時代の遺跡から多く出土する傾向がみられます。県内の黒曜石を出土する旧石器時代の遺跡とこれらの産地では、直線距離で100km以上離れている場所もあるにもかかわらず、黒曜石は多量に利用されており、旧石器時代の人々の黒曜石への強いこだわりがわかります。

常設展示室第1室の旧石器時代の資料は、考古学ファン必見です。ぜひご覧ください。

(展示担当 尾崎沙羅)

## 学芸員ノート 「<sup>みだ ひやくまんべん</sup>箕田の百万遍」行事の映像記録化について

当館では、平成 28 年度から無形民俗文化財調査事業「<sup>めぐりまわ</sup>巡り・廻りの民俗行事」を実施しています。この事業は、「神仏が信仰圏内を巡る、あるいは村内を廻ることが行事の中心となっている県内の民俗行事」を対象に、現行行事の現地調査を実施するとともに、動画による映像記録の作成を目的としており、この調査で得られた成果は、調査報告書や映像資料として公開・活用されることとなります。

本事業の調査対象となった「箕田の百万遍」は、例年7月の第一日曜日に、鴻巣市箕田の<sup>いなちよう なかしゆく おいわけ</sup>稲荷町・中宿・追分・<sup>しんでん</sup>新田の4地区で継承されているもので、大数珠を携え、<sup>かね</sup>鉦を叩きながら、それぞれの地区内をリレー形式で巡る<sup>なつきとう</sup>夏祈禱の民俗行事です。

この「箕田の百万遍」行事については、平成 29 年7月に現地調査を行い、昨年度末に調査報告書を刊行しましたが、聞き取り調査の過程で、この4地区では、4月に<sup>どうきようさい</sup>「道饗祭」と称して、獅子頭を携え、太鼓を叩きながらムラ廻りをして、各地区の境界に辻札をたてる<sup>はるきとう</sup>「春祈禱」の行事が行われていることが確認できました。

近年、地域環境の変化や、行事の担い手の高齢化等により、全県的に継承が困難になっているムラ廻りを伴う民俗行事を、春と夏の年2回、異なる形態で実施している箕田の4地区の事例は、極めて貴重であることから、今年度あらためて2つの行事について、動画による映像記録化を実施しました。

現地撮影にあたっては、画像の解像度や品質等を勘案し、画質をハイビジョン方式以上に設定し、それにより使用するカメラは業務用HD-CAM、HDV、またはDV C-PRO相当のスペックを有するものを2台使用し、画面アスペクト比は16:9で撮影しました。

また、それぞれの撮影班にはカメラマン、ビデオエンジニアを各1名ずつ配置し、収録画像の状態を常にチェックするとともに、音声については臨場感ある音源を目指し、ミキサー、ガンマイクを使用して収録しました。

当館では、これまで詳細な調査が行われてこなかった「箕田の百万遍」及び「箕田の道饗祭」の実態を、一般に



「箕田の百万遍」の撮影風景

広く理解してもらうことを目的に、今回収録した動画の映像記録をもとに、行事の内容をわかりやすく編集したDVDを製作しました。

DVDは普及版と展示版の2種からなり、普及版は一般向けの上映を想定し、放映時間は 30 分程度とし、行事の内容をわかりやすく伝えるための演出としてナレーション、テロップ、地図等のグラフィック、BGM等を取り入れて編集してあります。

展示版は展示室等での利用を想定しており、放映時間は 10 分程度とし、ナレーションはあえて未挿入としました。これらのDVDはジャケット及び盤面を作成し、専用のツールサイズケースに収めて完成となりました。

また、DVDには使用しなかったものも含め、本事業で記録されたすべての映像素材は、今後の調査研究や、映像データベースへの活用へ供するため、収録したカメラごとにフォルダを分けた上で、時系列順にファイルを並べるとともに、各ファイルには撮影地点や内容がわかるようなタイトルを付け、HD及びDVDに収めることとしました。

当館では、今後とも無形民俗文化財調査事業をとおして、県内の民俗行事の記録保存に務めるとともに、その成果を調査報告書や映像作品として内外に発信することで、こうした無形民俗文化財への理解促進と、行事の継承に繋がることを願っています。

(無形民俗文化財調査事業担当 二階堂実)